

事項	おうとう台木ダミル利用による「香夏錦」の低樹高化		
ねらい	<p>おうとうの省力栽培技術確立のためには低樹高化が必要である。おうとう台木ダミル（GM61/1）を利用した「香夏錦」でアオバザクラ台樹より樹が小さくおさまることが明らかになったので参考に供する。</p>		
指導 参考 考 内 容	<p>1 樹の生育</p> <p>(1) 幹周は小さかった。</p> <p>(2) 樹高は低い傾向にあった。</p> <p>(3) 地表面から最上位側枝基部までの高さは低かった。</p> <p>(4) 側枝の発生数及び密度は低かった。</p> <p>(5) 樹幅（樹列間）は短い傾向であった。</p> <p>2 収量及び生産性</p> <p>(1) 1樹当たり、幹断面積当たりの各収量に有意差はなかった。</p> <p>(2) 2年枝以上の側枝に着生した花束状短果枝の1m当たりの数は、多い傾向であり、最下位側枝から上部10本までの側枝に着生した花束状短果枝は、有意に多かった。</p> <p>3 果実品質</p> <p>果重、糖度、酸度とも差はなかった。</p> <p>4 ヒコバエの発生数</p> <p>ヒコバエの発生は認められず、管理面でも有利であると考えられた。</p> <p>5 以上の結果より、ダミル台樹はアオバザクラ台樹と比較して、幹周、最上位側枝高、樹幅からみると樹体がコンパクトであり、側枝の着生本数は少ないものの、花束状短果枝の着生密度が高く、低位置での収量の安定が期待される。</p>		
期待される効果	おうとう「香夏錦」の低樹高化と作業性の向上		
利用上の注意事項	樹齢が6年生までの結果であることに留意する。		
担当	青森県りんご試験場県南樹研究センター 栽培育種部	対象地域	県下全域
発表文献等	平成11年度 寒冷地果樹試験成績概要集 平成8～11年度 りんご試験場県南果樹研究センター試験成績集		

【根拠となった主要な試験結果】

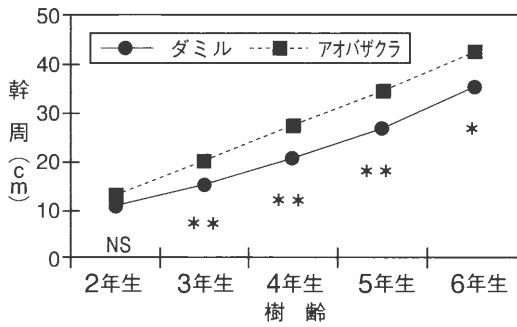


図1 幹周の推移

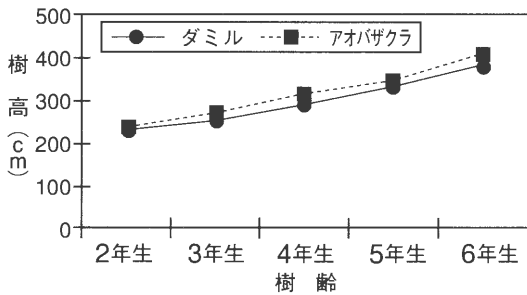


図2 樹高の推移

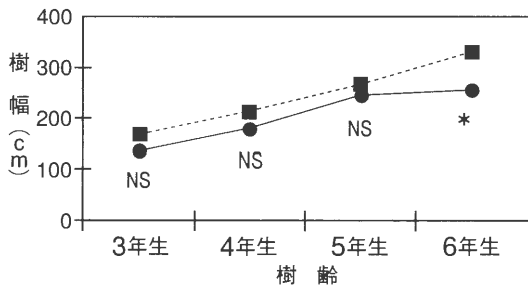


図3 樹幅(樹列間)の推移

表4 果実品質の推移 (平成10~12年 青森りんご試県南果研セ)

供試台木	1果樹(g)		糖度(%)		酸度(%)	
	ダミル	アオバザクラ	ダミル	アオバザクラ	ダミル	アオバザクラ
平成10年	5.09	5.89 NS	15.2	15.8 NS	0.66	0.61 NS
平成11年	6.23	6.30 NS	17.7	18.6 NS	0.99	1.04 NS
平成12年	5.60	5.84 NS	18.6	19.1 NS	0.83	0.81 NS

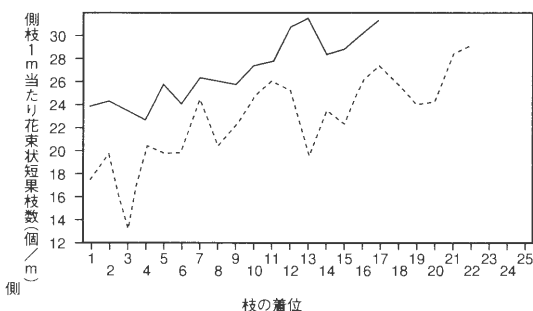


図4 側枝の長さと同花束状短果枝着生密度

表1 側枝の着生状況 (平成11年 青森りんご試県南果研セ)

供試台木	最上位側枝高 (cm)	側枝数(本)	
		1樹当たり	主幹1m当たり
ダミル	202.7	14.3	4.9
アオバザクラ	270.0	21.1	7.0
t-検定	**	**	**

注) 供試台木の栽植距離はダミル5.0×2.5m、アオバザクラ5.0×4.0mである(各図表とも同様)。

表2 側枝の花束状短果枝密度 (平成11年 青森りんご試県南果研セ)

供試台木	花束状短果枝密度 ²
ダミル	25.0
アオバザクラ	20.3
t-検定	**

注) ²: 最下位側枝から数えた上位10本分の側枝における、2年以上の1m当たり花束状短果枝着生数の平均値から算出した。

表3 収量の推移 (平成10~12年 青森りんご試県南果研セ)

供試台木	収量/1樹 (kg)		収量/幹断面積 (g/cm ²)	
	ダミル	アオバザクラ	ダミル	アオバザクラ
平成10年	1.7	2.8 NS	24.3	31.6 NS
平成11年	4.4	5.6 NS	40.3	40.6 NS
平成12年	3.7	5.9 NS		

表5 ヒコバエの発生状況 (平成12年 青森りんご試県南果研セ)

供試台木	ヒコバエ発生数(本)
ダミル	0.0
アオバザクラ	12.6